

また特設会場での「福祉機器開発最前線」では、宇宙航空研究開発機構（JAXA）が宇宙技術の製品などを展示し、注目を集めた。今回展示したのは、高齢者の介護予防への応用が期待出来るとしているハイブリッド・筋肉トレーニングマシンと、雑菌の増殖を抑えた素材で介護着などへの応用が考えられる宇宙被服、常温で長期間の保存にも耐え、一食でバランスよく栄養を摂取出来る宇宙食だ。限定された生活空間、時間が経つにつれて衰えていく筋肉など、軽くて強い製品が求められる点

が宇宙と介護の両方の技術に共通しているという。実際に、宇宙技術で使う軽くて強い素材カーボンやケブラーは車いすや衣服に、高分子吸水材は紙おむつに使われている。

また、最新技術の導入もさることながら、様々な柄や襟の付いたファッション性の高い介護エプロン、キャラクターや楽しいイラストがあしらわれたスポークカバー（車



いすの車輪部分に設置する円形のカバー）など、利用者の個性を引き出すアイテムも目立った。

「いつまでも住みなれた地域で暮らし続けるために」

第6回地域ケアシンポジウム開催

10月13日、第6回地域ケアシンポジウムが武蔵野公会堂（東京都武蔵野市）で開かれた。テーマは「いつまでも住みなれた地域で暮らし続けるために」。講演には落語家の林家源平さんが登壇。介護スタッフとしてデイサービスで5年間勤務した経験などを踏まえ、高齢者一人ひとりの個性を大切に接することの大切さなどをユーモアを交えながら訴えた。

また、「考えよう！最期まで自分らしく暮らすために」と題したパネルディスカッションでは、コーディネーターは在宅医療に取り組む新田クリニック院長の新田國夫氏、パネリストに小規模多機能施設ユアハウス弥生所長の飯塚裕久氏、小金井にし地域包括支援センター管理者の久野紀子氏、全国マイケアプラン・ネットワーク代表の島村八重子氏、武蔵野市健康福祉部高齢者支援課長の渡邊昭浩氏が参加した。

飯塚氏は、利用者で認知症の女性のエピソードを紹介。昔ピアノ講師だったことを知り、他の利用者やスタッフ、地域の子供達にピアノを教

えてみてはどうかと勧めた。その時の様子を写真などで記録し、本人に見せるようにしたという。飯塚氏は「認知症の症状があると自分達の日々の活動は忘れてしまうかもしれない。でも、私達は覚えているし、写真にも残る。自分の生き生きとした姿を回想出来る」と振り返った。

また久野氏は、詐欺被害に遭った高齢者の女性と、心配する家族の事例を紹介。解決法としてヘルパーなどからの情報の集約や成年後見制度を勧めたという。「自身で決めた在宅生活は“見守り”という家族の協力があって成り立つもの。その家族の意向も大切にしつつ、安全な在宅生活を支援していかななくてはならない」と述べた。

一方島村氏は、ケアプランを専門職に頼まず自分で作った義母のケースを紹介した。義母は自宅前にベンチを置き、近所の人といつでも井戸端会議が出来る「居場所」を作るこ



とで、地域との密な関係を築いてきた。

「これからどう生きていくか、自分らしい生き方とは何か、ということを要介護になってからではなく元気なうちからマイライフプランとして考え、人生設計やネットワーク作りをしていくことが重要」と述べた。

さらに渡邊氏は武蔵野市の高齢者施策について紹介。低所得者に配慮して介護保険料を所得に応じて14段階（国は6段階）設定していることや、ケアマネジャー研修センターを設置していること、高齢者や障害者の外出を支援する「レモンキャブ」の取り組みなどについて語った。